

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協同に基づく人類進化学理論の新開拓

第 3 回方法論研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です
Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2021 年 1 月 23 日（土） 13:00～17:00

場所： オンライン会議

発表者：

大村敬一（放送大学）

客観的記述から生産的変容へ：文化人類学における他者の記述をめぐる問題

3. 発表内容（発表レジュメ）

客観的記述から生産的変容へ：文化人類学における他者の記述をめぐる問題

（大村敬一）

ダンテは、地獄の門に穿たれている文をわれわれに教えてくれた。私には、解釈の民族誌への門にも、同じような標識が掲げられてあるような気がする。

「この門に入る者、すべての [真理への] 希望を捨てよ！」

（中川敏 1995「民族誌的真理について」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』p.262）

1 はじめに：この問題提起の目的と射程

※本小論の目的はあくまで問題提起であって、以下の整理によって生産的な議論を喚起すること。

（1）大目的：人類を含めた霊長類を共通の概念と方法で研究する手法を文化人類学の立場から考える。

「如上の目標に到達するために心がけるべきとりわけ重要な点は、人間と霊長類の調査研究において、最

大限、同じ方法で同質のデータを収集すること、および、それらを同じ概念を用いて分析・考察することである。だが、人間と霊長類のフィールド調査を同等な質・量で実施し、比較分析に耐えうる同等な質・量のデータを収集するのは容易ではない。それは極めて困難なアプローチであり、緻密で実証的な方法論の確立が求められている。この状況に鑑み、本研究では新しい調査手法自体の開拓を根本的に重要な研究内容に含める。(中略) まずは人間と霊長類における個体間の相互行為を観察し記述する方法的試みとして、霊長類学で一般的な個体追跡法を採用し、追跡個体が関与する一連のエピソードに参加したすべての個体の行為接続の全体を綿密・詳細に記録・記述する質的観察データの収集方法を精緻化することから開始する。これにより、定量的な収集データの意義が深められ、質的データとの組み合わせとして相乗効果が図れるからである。」(河合、科研申請書)

(2) 中川敏さんの 1995 年の論考「民族誌的真理について」(米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』 pp.248-263) での議論を紹介する。

- ・問：クリフォードの「民族誌的権威について」論文の是非
- ・「行為記述の等級」(←オースティンの言語行為論)の導入
- ・記述の正当性の検討

※1990 年代(大村の院生および主計課勤務時代)、ごめんなさい人類学(人類学の危機：他者記述の問題)から解放してくれた二つの論考の一つ(ちなみに、もう一つは小田亮さんの「ポストモダン人類学の対価」)。

(3) 他者記述(他者表象)に関する中川敏さんの議論を拡張しながら、人類学と霊長類学の協働を可能にする方法論を考えるための問題提起を行う。

※とくに、以下の田辺明生さんの問題提起(FSCでのコメント)を整理。

「つまりサル(特に類人猿)には高度な自己意識の働きがあって、人間とそれは連続的なのだと。ただし、もちろん質的な違いや「深みや幅」の差異は当然あって、サル(それぞれの種)固有の意識の在り方と社会構造および生物学的なアルゴリズムとの関係を明らかにしていくというのが、これからの広義の人類学における課題ではないかと思います。ヒトでもサルでも、主体性(意識構造)、社会性(社会構造)、そして生物学的基盤さらには生態環境のあいだの関係性を総体的に描いていくということが、今、求められているのであって、この課題において類人猿研究と人類学は共通しているのではないかということを全体として思いました。」(「コメント1」『ヒトを見るようにサルを見る』 p.37)

https://sociality.aa-ken.jp/data/wp-content/uploads/2020/11/Report_on_colloquium_2020.pdf

2 「民族誌的真理について」

2-1 背景：ごめんなさい人類学（民族誌記述の政治性への自己批判）

(1) 「民族誌リアリズム批判」（クリフォードなど、『文化を書く』ショック）

- ・民族誌の魔法：フィールドワークでの部分的で主観的なデータに基づいてアカデミズム世界や主流社会で書かれた民族誌がいつの間にか真実になる。

※実際に文化を生きているが、文化に無知な（無意識な、無自覚な）現地の人びと

※文化を書くことで、文化を熟知している（意識している）民族誌家

- ・民族誌的権威：民族誌の「正しさ」を支えているのは所謂「科学的」根拠ではなく、アカデミズムの慣例に基礎づけられたレトリックに基づく権威。

(2) オリエンタリズム批判（サイード）

- ・民族誌的権威の政治性
- ・民族誌：美術や文芸でのオリエンタリズムと同様に、西欧近代の他者を政治的に威圧して併呑するための植民地主義の道具

(3) ごめんなさい人類学：文化人類学の自己批判と反省

「これらの非難を受けて、ナイーヴな人類学者は、民族誌を「(自分だけで) つくってしまったこと」を自己批判する—「先に述べたような問題意識を抱いて、「雨と紛争」を読み直してみたとき、私は、自分が用いたレトリックやつじつま合わせに初めて気づくことになった」(p.250)

2-2 問い

「はたして、民族誌家は、そのような自己批判をおこなわなければならないのだろうか。」(p250)

⇒クリフォードの「民族誌的権威について」論文の批判

2-3 「行為記述の等級」（←オースティンの言語行為論）の導入

(1) 同じ現象の複数の書き方

「民族誌にかぎらず、ある現象を記述しようと思えば、いくつもの書き方がある」

Aa「首長の話が終わるころに、maj noo がゆっくりと立ち上がり、背伸びをし、あくびをした。」

Ab「中年の男が、非公式に、リーダーシップを発揮しはじめた。」

Ba「中原は、四角い木片を動かした。」

Bb「平成五年度名人戦第一局の第一〇二手が指された。」

Bc「中原は4二銀とした。」

Bd「中原は、相矢倉を拒否した。」

Be「中原は、挑戦者をおどろかした。」

Bf「中原は、新戦法を採用して、戦いを有利にした。」

Bg「中原は、熱帯雨林を破壊することによって作られた将棋盤を使用した。」

Bh「中原は、天井裏に潜んでいる隠密に駒の動きの暗号で指令を与えた。」

(2) オースティンの言語行為論における言語行為の三つの記述レベル (等級)

(I) 発話行為レベル:「語ること」自体としての行為

・「彼は私に「彼女を射て」と言った。」

(II) 発話内行為:発話をする事の「なかに」おこなっていること

・「彼は私に、彼女を射つように促した。」

・「彼は私に、彼女を射つように助言した。」

・「彼は私に、彼女を射つように命令した。」

(III) 発話媒介行為:発話すること「によって」おこなった行為

・「彼は私に対して、彼女を射つことを説得した。」(直接的)

・「彼は私に彼女を射たせた。」(間接的)

(3) 中川敏による三つの記述レベルの行為一般への拡張

・記述 I :「彼は手を上げた。」⇒観察文

「木片が動かされた」「ボールが舞い上がった」

・記述 II :「彼は(研究会で、質問のために)挙手をした。」⇒規約・制度文⇒規約の民族誌

「挙手をする(質問をする)」「助言する」「命令する」「インフィールド・フライ」「4
二銀」

・記述 III :「彼は(研究会を)盛り上げた(サクラとして質問をした)。」「⇒解釈(文)⇒解
釈の民族誌

2-4 民族誌記述の三つのレベルと真偽の基準

(1) 観察文:純粹意図に関する記述

・「儀礼を生態学的に説明するといった類の民族誌」(p.256)

・記述される行為の意図:人間全般にとって透明な意図

「(1) の記述にみられる行為者の意図は、(その行為者と同じ文化に属する者だけでなく)だれにとってもあからさまである。彼は、その記述にあらわれる通りの意図、「なにになにと言う」意図、「手を上げる」意図をもっていたのだ。」(p.257)

・真偽の基準:アリストテレス流の真理の対応説

「そうであることをそうでないと言うか、またはそうではないことをそうであると言うことは偽であり、そうであることをそうであると言うか、そうでないことをそうでないと言うことは真である。」

「「なにになにと言う」あるいは「手を上げる」と語るには、民族誌家の努力を必要としない。

(中略) その記述を正当なものとするのになんらかの権威が必要であると考えする必要はない。インフォーマントに教えてもらわずに一もっと端的にいつてしまえば、インフォーマントとの対話的状況なしに一そのように記述することを学びうるのだ。(中略)「手を上げる」

はそれほど人間としての基本的な行為（記述）なのである。(1)の記述だけが問題になるかぎり、記述（民族誌）の権威の登場の余地はない。記述者が人間であることだけで、必要十分な権威なのである。」(p.254)

「この等級の記述に理論負荷性があるかどうか（間文化的に翻訳可能かどうか）は、人類学的にはトリヴィアルな問題である。(2)の記述が、(1)の記述に還元されないことさえ確かめられれば、人類学的に問題とならない。」(p.253)

⇒本プロジェクトでは問題になる：後述

（2）規約・制度文：規約の民族誌

・行為に基づいている規約の記述（文化の記述）：「死んだ、しかし整然とした体系の描写」(p.256)

・記述される行為の意図：文化（規約）を共有する者たちにとって透明な意図

「通りすがりの人間には、これらの記述（「挙手をする（質問をする）」「助言する」「命令する」「インフィールド・フライ」「4二銀」）」としてあらわれる行為の意図は不明である。規約を共有する者のみ、すなわち文化を共有する者（プラス有能な民族誌家）にのみ、行為者の意図があからさまとなるのだ。これらの者、文化内の者にとっては、行為者の意図は、(1)の記述にあらわれる意図と同様に透明である。」(p.257)

・規約共同体：「規約が共同体を含意する、といえるように思えるかもしれない。規約がなければ規約共同体はたしかに存在しない。しかし、より論理的に言えば、むしろ、規約共同体がなければ規約はありえない、というほうが正確なのである。」

・真偽の基準：真理の整合説

「文化のもつ規約（(2)の記述がもつもの）の内的な整合性についての彼の報告にある。」「われわれがそのような論文に言語学者の仕事として期待するのは、その体系の整合性についての彼の言い分である。」(p.256)

「(2)の記述を正当化するのは、民族誌家が規約を体得したこと、あるいは規約共同体に属したことだけ（その点については民族誌家を信じるしか道はない）のである。」(p.255)

・規約の民族誌の価値：「(2)の記述にもとづく民族誌の価値は、それを学びとった過程の吟味にあるのではなく、文化のもつ規約（(2)の記述がもつもの）の内的な整合性についての彼の報告にある。「個々人の生き生きとした描写」ではなく、「死んだ、しかし整然とした体系の描写」が、(2)の記述をターゲットとする民族誌の目標をすべきものののだ。」(p.256)

（3）解釈（文）：解釈の民族誌

・個人によって展開される「物語」を成り立たせる「原理」：「(2)の記述にもとづくかぎり、「物語」は成立しない。一手一手記載された棋譜に、物語はない。初心者には、棋譜を並べることができても、そこに「深い物語」を読むことはできない。「物語」は、有能な解説者によってつくられるのだ。ある棋譜を読んだ解説者による「物語」は、たとえば、つぎのようなものであるかもしれない—「ここで、中原は大さばきに出ようとしたが、挑戦者

はそれを拒否した」「挑戦者のねらいは、一気に終盤に入ることだが、中原は、手持ちをして、持久戦にもちこもうとした」。この物語は、絶対的な正当性を有してはいないことは忘れてはならない。棋譜を否定することは正当ではないが、解説者の物語を否定することは、つねに正当なのだ。」(p.261)

- ・「政治」(「解釈」の一部門) : 「いわば「ミクロの政治」の領域である。典型的には、一対一の状況であられる「あいつを言いまかしてやろう」あるいは「あいつを圧倒してやろう」という意図に代表されるような状況を指すことばとしての「政治」である。」「ただし、「内閣」「行政府」「大統領」あるいはより人類学的なところでは「聖なる王」といった語彙が属している領域としての「政治」ではない。それらの語彙は、(2) の記述すなわち規約・制度の記述に属している。」(p.258)

- ・「下司のかんぐり」 : 「(解釈の) 意図は行為者本人以外にはわからない」(p.257)

- ・記述される行為の意図 : 誰にとっても不透明

「行為者の意図は不透明である。「意図は行為者本人以外にはわからない」という格言が通用するのが、この (3) における「意図」なのだ。「彼」は決して「私」に「彼女」を射たせようと意図して、「彼女を射て」と言ったわけではないかもしれない。「彼」は、「盛り上げよう」といった意図ではなく、真摯な質問をおこなったのかもしれない。行為者以外の人間による (3) の記述は「下司のかんぐり」以外のなにものでもないのだ。」(p.257)

- ・真偽の基準 : ない (「だれによっても正当化されない。民族誌家のみならず、当事者のそれもまたそうなのである。」(p.260)「(3) の記述にもとづく民族誌に真理は存在しない。」
「(3) の記述は行為者本人以外によっては、正当化されえないのだ。民族誌家にかぎらない、たとえ「現地の人」によるものであっても、(3) の記述は正当ではない記述なのだ。」(p.257)

- ・解釈共同体 : 「解釈と共同体の結びつきは、たんに偶有的なものだ。一人だけの規約 (たとえば私的言語) はありえないが、一人だけの解釈は十分考えられる。」(p.260)

- ・規約と解釈の違い : 「規約は一気に変化 (誕生) するが、解釈は徐々に変化 (誕生) するのだ。言語の誕生を「あるとき一気に誕生した」(レヴィ=ストロース) としか論理的に考ええないことを思い出してほしい。民族誌家の経験に即していえば、彼(あるいは彼女) は、規約は一気に獲得するが、解釈は徐々に獲得するのだ。」(p.260)

- ・問い : 「下司のかんぐりをおこなうのは、民族誌家だけではない。現地の人がおこなっているのだ。その記述は、人類学のデータであろう。これをどのようにあつかうべきなのか」
「(3) の記述に焦点をあてる民族誌は、いかなるものであるべきなのか」(p.261)

- ・解1 : 「たとえば、民族誌家が解釈共同体に属したとしても (自信があったとしても)、民族誌家自身による (3) の記述は民族誌に出現してはいけないのだ」(p.261)

- ・解2 : 「民族誌家がおこなわなければいけないのは、現地の人々の解釈 (それは解釈の解釈であってもよい) を記録にとり、それを (自分の解釈—たとえば「政治」「権力欲」—を入れることなく) 描写し、その解釈による物語の「原理」を抽出することなのだ。それは

たまたま「政治」かもしれない。もしかしたら、逆に「協調」なのかもしれない。繰り返すが、民族誌家が物語を紡ぎだすことは正当化されない営為である。」(pp.261-262)

2-5 結論

「民族誌の真理についてまとめて、この章を終えたい。(1)の記述にもとづく民族誌は、現実との対応をもって、真理であるか否か判定される。(2)の記述にもとづく民族誌は、理論内部の整合性をもって、真理であるか否か判定される。(3)の記述にもとづく民族誌に真理は存在しない。ダンテは、地獄の門に穿たれている文をわれわれに教えてくれた。私には、解釈の民族誌への門にも、同じような標識が掲げられてあるような気がする。「この門に入る者、すべての〔真理への〕希望を捨てよ!」」(p.262)

3 中川敏論考の検討による問題提起

3-1 大村のいくつかの意見

- (1) 「物語」を「(物質=記号論的な)世界」に読みかえる。
- (2) 解釈には「真理」は存在しないが、「効果」は存在する(⇒参考1)。
- (3) 解釈の民族誌: 規約の民族誌(文化の文法と辞書)に基づいて、人びとが規約としての文化の限界内で、その文化を運用しながら、解釈にもとづく物語を行為(言語も含む)で展開しつつ相互に交渉するなかで世界を生成・維持もしくは変容させてゆくプロセスをメカニックに(物語によってではなく)記述する。
- (4) メカニックとしての民族誌家(「客観的記述」から「生産的変容」へ):
メカやマシン(たとえば言語)を制作・運用して世界を生成・維持もしくは変容させるのは人びと(戦闘機パイロット)であって、民族誌家はメカニックとして、メカやマシンを整備しつつ、その潜在的な可能性を掘り起こして人びとの運用と改良の選択肢を拡大させるようにつとめる。
⇒大村の生業システム(マシン)の記述。

3-2 田辺明生さんの問題提起(FSCでのコメント)の整理

「つまりサル(特に類人猿)には高度な自己意識の働きがあって、人間とそれは連続的なのだと。ただし、もちろん質的な違いや「深みや幅」の差異は当然あって、サル(それぞれの種)固有の意識の在り方と社会構造および生物学的なアルゴリズムとの関係を明らかにしていくというのが、これからの広義の人類学における課題ではないかと思います。ヒトでもサルでも、主体性(意識構造)、社会性(社会構造)、そして生物学的基盤さらには生態環境のあいだの関係性を総体的に描いていくということが、今、求められているのであって、この課題において類人猿研究と人類学は共通しているのではないかということを全体として思いました。」(「コメント1」『ヒトを見るようにサルを見る』p.37)

https://sociality.aa-ken.jp/data/wp-content/uploads/2020/11/Report_on_colloquium_2020.pdf

「ヒトでもサルでも、主体性（意識構造）・社会性・生物学的基盤（と生態環境）の〈あいだ〉（関係性）を描くことが重要。それぞれの種や社会の固有の関係性の総体を描くことが広義の人類学では重要。」（レジュメ）

- （１）生物学的基盤（と生態環境）：観察文（純粹意図に関する記述）、「儀礼を生態学的に説明する」といった類の民族誌 ⇒ 生物システムの記述のレベル（等級）
- （２）社会性（社会構造）：規約・制度文（規約の民族誌） ⇒ 社会システムの記述のレベル（等級）
- （３）主体性（意識構造）：解釈（文）（解釈の民族誌） ⇒ 歴史（ミクロ政治）の記述のレベル（等級）
- （４）主体性（意識構造）、社会性（社会構造）、生物学的基盤さらには生態環境のあいだの関係性
 - ・ 3 レベルの階層性：レベル（３）の解釈は、レベル（２）の社会的な規約の制限内で、その規約を運用することで展開され、レベル（２）の規約は、レベル（１）の生物システムの制限内で、そのシステムを運用することで展開される。
 - ・ 3 レベルの相互作用による歴史的展開（生産的変容としての進化）

3-3 問題提起：「社会性の起源と進化」プロジェクトの焦点

- （１）レベル 2 の社会性（社会構造）（規約・制度文（規約の民族誌）、社会システム）が焦点
- （２）まず、現生霊長類のレベル 2 の社会システム（規約システム）の類型化を行う。
- （３）社会システムのタイプのそれぞれが一挙に成立する条件をレベル 1 とレベル 3 との相互作用から考える。←規約は一気に変化（誕生）するが、解釈は徐々に変化（誕生）する。
- （４）この際には、「できるのに、しない」あるいは「たががはずれる」という視点が重要ではないか？
（⇒参考 2 : VTR『文化人類学の最前線』「第 14 回 生物進化の中の人類：人類の過去と現在」展開 3 「人類進化史研究の展望」）

＜参考 1：「真理」から「効果」へ＞（「世界生成のシステムのエンジン：イヌイトと近代の存在論の比較からみる存在論の機能」『文化人類学』（査読中））

「21 世紀に入って提唱された「人新世」という概念のもと、これまで「進歩」の名のもとに無我夢中でひた走ってきた近代のプロジェクトに警鐘が鳴らされている。このプロジェクトでは、ラトゥール [2008] が明らかにしたように、「自然／人間（社会・文化）」の二元論的な存在論に基づいて、「自然」の世界と「人間」の世界を明瞭に分けたうえで、科学の実践によって「自然」の世界が従う法則を明らかにし、政治の実践によって理性に基づく合理的な法を編み出すことで、「自然」の世界の制御と理想的な「人間」社会の建設が「進歩」として追求されてきた。しかし、人工的に生み出された大量の汚染物質の地球環境への拡散と蔓延、地球温暖化をはじめとする急激な気候変動、6 度目の大量絶滅とまで言われる生物多様性の急速な激減、思いもよらぬ病原体によるパンデミックなどの衝撃的な事実によって、人類の活動が地球という惑星の営みに思わぬ影響を与え、その結果として生じる地球の変化が人類に思いもかけない影響を与えることがあらためて知らしめられるようになり、近代のプロジェクトを基礎づけてきた「自然／人間」の二元論的な存在論の妥当性が大きく揺らいでいる [大村 2017a, 2017b; 大村&湖中編 2020]。地球に象徴される「自然」の世界と「人間」の世界を画然と分けることができず、これら二つの世界が分かち難くもつれ合っていることをもはや否定することはできないからである。

しかし、そうであるからと言って、「自然／人間」の二元論的な存在論を完全に否定することもできない。たしかに、現状では、地球と人類のもつれ合いが顕在化し、「自然」の世界と「人間」の世界を分かち合えないように見える。しかし、それは、科学と政治の「進歩」が不十分であるために、「自然」の世界が従う法則が十分に明らかになっておらず、理性に従った合理的な法が未だ打ち立てられていないためであって、あるいは、いつか未来にあっては、「自然」と「人間」の世界を明瞭に分かつ真なる自然法則と合理的な法を手にし、その法則と法によって二つの世界のもつれ合いを解きほぐすことができるかもしれない。もちろん、その逆に、この存在論が決定的に間違っていることがわかり、近代のプロジェクトそのものを断念せねばならないときがいつか来る可能性もある。いずれであるにせよ、超越的な視点をもつ神ならぬ人間には、現実の宇宙がどうなっているかを直接に知る術はなく、存在論の真偽は、その存在論に基づく実践、たとえば、観測や実験などの科学の実践をはじめ、その結果に基づいて宇宙に手を加える技術や経済の実践、立法などの政治の実践、さらには、その法の執行にかかわる行政や司法の実践が、現実の宇宙でどこまで有効なのかを検証することを通して、間接的、近似的に推測する他にない。

そうであるならば、今日の時代にあって私たちに求められているのは、ラトゥール [2008] が先鞭をつけたように、近代のプロジェクトが「自然／人間」の二元論的な存在論によって基礎づけられるメカニズムを探りつつ、そのメカニズムで組織化される実践が現実の宇宙でどこまで有効なのか、また同時に、どのような問題を引き起こしているのかを検討し、その検討に基づいてプロジェクトを修正しながら再検討する実験の過程を繰り返すことで、この存在論の妥当性を漸進的に検証してゆくことであろう。そのためには、冒頭にあげたインゴルドの提案にあるように、この存在論の正しさを前提に「人間」の世界と「自然」の世界を一方的に客体化する視点を所与のものとするのを止め、多種多様な生命体がダイナミックにもつれ合う現実の宇宙のなかで、この存在論がどのようなメカニズムで機能し、その過程で現実の宇宙を「人間」の世界と「自然」の世界として客体化する実践がいかに組織化されているのかをまずは精査す

る必要がある。「自然／人間」の二元論的な存在論の真偽を問うたり、その妥当性を検討したりするに先立って、この存在論が現実の宇宙で展開される近代のプロジェクトで果たしている役割をまずはつまびらかにするのである。

これと同じことは、先住民の存在論にもあてはまるだろう。近代の「自然／人間」の二元論的な存在論が揺らいでいる今日にあっては、かつてのように、近代の存在論の正しさを前提に様々な先住民の存在論を現実の宇宙の多様な解釈として退けるわけにはいかない。しかし、そうであるからと言って、先住民の存在論が宇宙を正しく描き出しているということになるわけでもない。その真偽も、近代の存在論の場合と同様に、その存在論に基づく実践が現実の宇宙でどこまで有効なのかを検証することを通して間接的、近似的に推測する他にない。したがって、今日の時代において、多様な先住民の存在論と近代の存在論は、その真偽を直接に知りえないという前提のもと、多種多様な生命体がダイナミックにもつれ合う現実の宇宙という地平に等しく位置づけられて理解され、それぞれの存在論に基礎づけられた実践がその地平でどこまで有効なのかによって評価される等価で対称的なものとなる。21 世紀に入って、人類学の存在論的転回の動向において先住民の存在論が近代の存在論と対称的に真面目に取り上げられ、マルチスピーズ民族誌において、「自然／人間」の二元論的な存在論が保留され、人類の営みが多種多様な生命体がつれ合う宇宙に位置づけられながらあらためて再検討されているのも、こうした「人新世」というキーワードに象徴される今日の時代状況の必然であると言えるだろう。」

<参考 2> (VTR『文化人類学の最前線』「第 14 回 生物進化の中の人類：人類の過去と現在」展開 3 「人類進化史研究の展望」)

収録方法：スタジオ収録

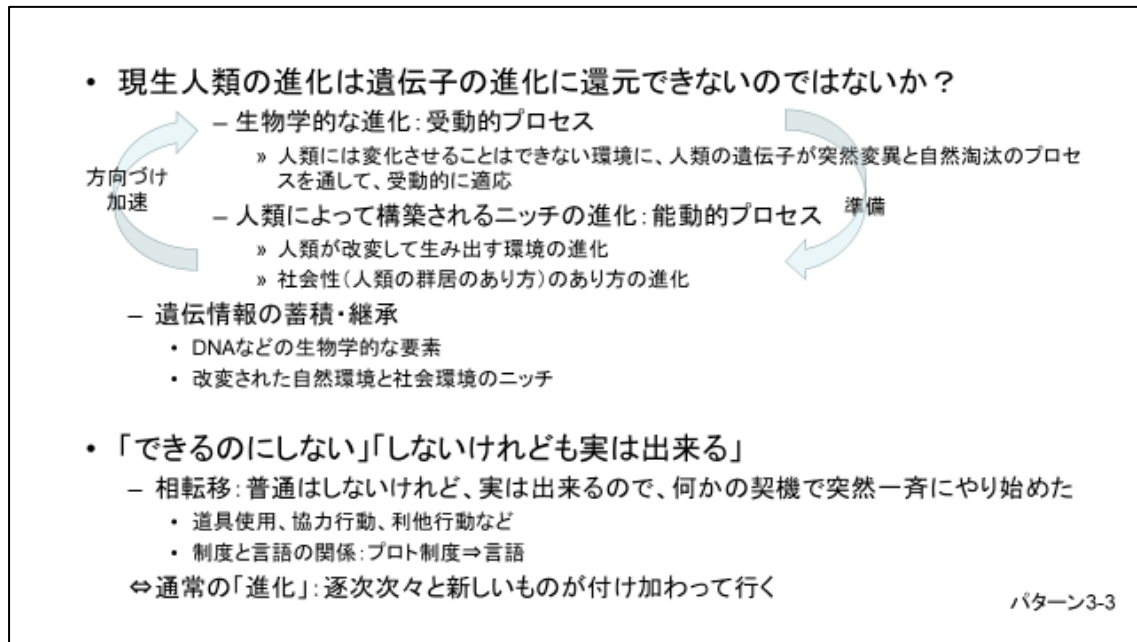
ゲスト：入来篤史（理化学研究所チームリーダー）、河合香吏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）

(IV) 展開 3：人類進化史研究の展望：スタジオ、大村・入来・河合立ち、パターン（17 分程度）

背景 IV：人類進化グラフとサルとヒトの背景

—大村：皆さん、入来さんと河合さんのお話し、いかがでしたでしょうか。

—大村：たしかに、お二人からいただいたお話しはとても対照的でした。人類進化のプロセスという同じ一つのテーマに対して、入来さんの「三元ニッチ構築」仮説は実験室での現生霊長類の実験に基づいたアプローチ、河合さんのお話しはフィールドワークでの現生霊長類のフィールド調査に基づいたアプローチ、つまり、お二人のお話しでは、探究の方法が対照的に異なっていたわけです。しかし、どちらのお話しも共通の問題を提起していることに、皆さんもお気づきになったのではないのでしょうか。



一大村：(パターン3-1) それは、遺伝子の進化に現生人類の進化は還元できないのではないかという問題提起です。

一大村：入来さんのお話の場合、人類が改変して生み出す環境の進化、河合さんのお話の場合、人類の群居のあり方の進化、つまり社会性のあり方の進化も含めたかたちで、人類の進化を考えねばならない。人類には変化させることはできない環境に、人類の遺伝子が突然変異と自然淘汰のプロセスを通して、単に受動的に適応するだけで、人類の進化が生じたわけではない。むしろ、人類が変化させる自然環境と社会環境の進化、これを入来さんのことばをお借りすれば、「人類によって構築されるニッチの進化」ということになると思いますが、これが人類進化の重要な要素となっている。

一大村：もちろん、そうだからと言って、人類の進化にあたっては遺伝子の進化が重要な要素となることが否定されるわけではありません。むしろ、霊長類から現生人類にまでいたる人類進化の特徴は、そうした遺伝子の進化が、人類が集合的に変えてゆく自然環境と社会環境のニッチの進化によって方向づけられ、その方向に加速されるという点にある。また、人類の場合、遺伝情報は DNA だけに蓄積されて継承されるわけではなく、むしろ、遺伝情報の多くの部分が、改変された自然環境と社会環境のニッチに蓄積されて継承される。こうした意味で、人類の進化のプロセスを明らかにするためには、DNA の進化を検討するだけでは不十分であり、自然環境と社会環境に人類が構築するニッチの進化も視野に入れる必要があるのではないか。そういう問題提起でした。

一大村：この第3セクションでは、この共通の問題提起を軸に、お二人それぞれのお立場から相互のお話にコメントをいただきながら、人類の創造性と可変性の進化史的な基盤とは何か、そして、その基盤が人類の未来にどのような可能性を開いてくれるのか、考えてゆきたいと思います。

一大村：さしあたって、入来さん、現生霊長類のフィールド調査の比較研究に基づいて人類社会の進化史的な基盤を探究してきた河合さんの探究についてコメントしていただけますか。

—入来：（パターン3-2）河合さんのお話しで印象的だったのは、『できるのにしない』というお話でした。進化や発展を考えると、だんだんと『できるようになる』ことが次々と積み重なって次第に高度にまた複雑化してゆくのだ、ということを当然のように前提として考える傾向がありますが、実は『できるのにしない』状態が準備されるというプロセスが極めて大事だ、ということに気がつきました。こう考えると、人新世に至る人間の発展発達、一気にある方向に爆発的に進んだことが良く説明出来るような気がします。つまり、出来るのに、不必要だからやらなかったか、あるいは何らかの理由で抑えられていたものが、ある契機がトリガーとなって一斉に発現した、というふうに考えるとストンと肚落する。そう考えると、文化発展と生物進化の相互関係のメカニズムとして、これまでとは全く違った景色が見えてくるのではないかと思います。

—大村：なるほど、入来さんのお話しにあった「第一の相転移」ですね。学習などの外的な刺激によって脳が単に大きくなるのではなく、神経細胞が増加して新たな神経領域が物理的に生じるという生物学的な進化によって「第一の相転移」が生じ、それが「第二の相転移」である「三元ニッチ構築」を準備した。

—大村：そうだとすると、入来さん、こうした「できるのにしない」という事実によって、文化発展と生物進化の相互関係のメカニズムについて、これまでとはどのように違った景色が見えてくるのでしょうか。

—入来：普通「進化」とか「発展」とかいうと、逐次次々と新しいものが付け加わって行く、というイメージで考えてきました。しかし、これだと、人間文明が「人新世」と言われるようになった、諸説幅はあるにしても最近数千年程度の短期間で、一気に、しかも世界中至る所で、多様性はあるにしてもかなりの類似性をもって、同時多発的に急速に発展したことをうまく説明するには無理がある。けれど、それまでの生物としての進化の過程で素地は準備されていたものが、それが何らかの理由（※←これが何らかの「制約」だったかもしれない・・・）で箍が外れてある方向に向かって一気に花開いた、という「平行進化」とか「収斂進化」といったものと似たメカニズムを想定すると、世界の人間文明形成のメカニズムとしての多くの謎が氷解するのではないかと思います。

—入来：じゃあ、『しないけれども実は出来る』ことをどうやって、検出し証明するかが鍵になると思いますが、我々実験家は、例えばお見せしたサルの実験のように、ちょっと訓練したり条件を与えてあげたりして、背中を押してやると、意外なほどすんなり出来るようになる、というような方法が使えます。

—入来：私のサルの場合は、野生の状態では道具を使って遠くのものを取るなどというまどろっこしいことをするよりも、さっさとそこに移動して行って取った方が楽だし、まごまごしていたら他のサルに取られてしまうので道具なんて使うのは不利だから抑えられていたかもしれないけれど、椅子に座らせて他のサルもいない状況をつくって、条件を制限してやるとすんなり出来る、ということかもしれません。

—入来：こんな、状況の差、のようなものを構造化して、『普通はしないけれども、実は出来るので、何かの

契機で突然一斉にやり始めた』というようなことは無いのでしょうか？例えば、ネアンデルタール人の脳は現生サピエンスよりも大きい位だった訳で、すでに何でも出来る状態になっていたけれども・・・、というようなことはありませんか？

—大村：河合さん、いかがでしょう。

—河合：私が先ほど言ったのは、実験下のサルやヒトにおける「できる・できない」という個体の能力の問題と、野生状態の霊長類や人間の生活世界における仲間との相互行為のなかで実際に「する・しない」という実践の問題は別であるということです。人間がふつうにしていることで野生霊長類には観察されない行動はたくさんあるわけです。けれども、霊長類を被験者とした実験で明らかにされてきたことです。そうした行動は、サルや類人猿を実験室に連れてきて、群れから離して1人（や2人）にさせて、課題を与えてトレーニングしてやらせてみると「できる」ということがけっこうある。心理系、認知科学系で盛んに実験されているのは、人間に独自の、あるいは特異に発達している「社会性」と彼らがいうところの、協力行動や利他行動、道徳の萌芽とみられる行動などです。霊長類たちは、そうした行動が「できない」わけではなく、野生下では「しない」のです。それは自然状態では「する」必要がないからと言ってよいでしょう。潜在的な能力はあるけれど、「しない」ということがあるのです。ですから、環境が変わって必要に迫られれば、その潜在的な能力が発揮され、実際に「する」ということが発現する、ということになるのだと思います。これは野生チンパンジーの食物獲得行動としての道具使用や餌付けされたニホンザルの芋洗のような文化的行動などに顕著に見られます。

—大村：なるほど、「普通はしないけれど、実は出来るので、何かの契機で突然一斉にやり始めた」ということは、人類の進化史においても十分にありえたことなのですね。それでは、社会性の進化では、どうだったのでしょうか。

—河合：この点について考えるために、繰り返しになりますが、先ほど少し触れました「制度」について、もういちど考えてみましょう。とくに制度と言語の関係です。ポストモダン的な思想の影響下でいわれてきたのは「制度は言語によって社会的に構成されたもの」という構築主義的な制度論でした。ですが、「言語」も、特定の言語規則にしたがうことで初めて「言葉を使う」ことが可能になるという意味で、制度の一つです。そうである以上、この制度論は「制度は制度によって作られている」と述べているだけで、制度の生成や進化については何も論じていないことになります。私たちがやろうとしてきたのは、「制度」という言葉の意味を可能な限り広くとり、人類が「集団で生きる（群居）」ということによって示す社会事象の根源的・本質的な性質を明らかにすることでした。そのために人類だけでなく、霊長類も研究対象として、比較研究をしてきました。

—河合：言語と制度の関係について、そこで明らかになったのは、音声言語が具体的にいつ頃発生したのかという年代は依然分からないけれど、少なくとも霊長類、つまり類人猿やサルたちが、他者とともに暮らすためのコミュニケーションの方法をもっていて、それを互いに共有しているということ、それは

共存のための個体間の関係を律する行動原理に他ならないという意味で、制度、といういい方が強すぎるようなら「前制度＝プロト制度」とか「自然制度」と言ってもよいものですが、そうした制度の萌芽を既に獲得していた人類の祖先が、何らかのきっかけで言語を使い始めるようになった、ということです。

—大村：なるほど、どのような生物学的なメカニズムかはわからないけれども、「制度」を可能にしたメカニズムの生物学的な進化がすでにあって、それを土台に多様な制度が進化してきたし、その進化の過程で制度の一つとして言語も進化してきたということですね。

—河合：その通りです。先ほども言いましたように、言語はひとつの制度です。進化史的に見れば、制度が言語を準備したのであって、その逆ではない。言語が制度を構築したわけではないのです。そして、いったん言語が誕生すると、今度はその言語によって制度が精緻化されたり厳格になったりといったことが起きてくる。そうして制度と言語の相乗効果（共進化？）によって両者が発達、発展してきたのではないのでしょうか。

—河合：音声言語の誕生は、これまで考えられてきたよりもずっと古く、アウストラロピテクス属の時代にさかのぼるという説もあります。その頃の言語は、捕食者対策や広い遊動域における効率的な採食活動 (foraging) のための発話＝音声コミュニケーションとして、言語としては萌芽的なものだったと考えられますが、それがおそらくその後の大脳化のころに複雑な文法構造をもつものへと一気に開花したのではないのでしょうか。その頃には社会の方にもさまざまな大きな変化があって、集団サイズの拡大や、社会性の複雑化、協力行動の促進や共同保育の促進などが起きたと考えられていて、音声言語の飛躍的な発達もあったのだと思われます。大脳化の時期にどのようなきっかけがあったのか分かりませんが（あるいは大脳化という生物進化（＝形質的な進化）自体が「きっかけ」なのかもしれませんが？）、入来さんのおっしゃる「籐がはずれる」ということがこの時期に起きたのではないのでしょうか。

—大村：なるほど、「普通はしないけれど、実は出来るので、何かの契機で突然一斉にやり始めた」ということは、実証的に確認される事実であるということですね。ということは、(パターン 3-3) 生物学的な進化によって人類に可能になる能力、たとえば、DNA の進化が可能にする能力は、実はかなり幅の広いもので、その能力を足がかりに生み出される認知技能や環境改変やニッチ構築や社会性も大変に多様なものとなる。つまり、生物学的な進化によって人類の社会性やニッチ構築などのあり方は決定されるわけではない。もちろん、そうした社会性やニッチ構築のあり方が多様であるとは言っても、その多様性は生物学的な進化によって準備された生物学的な能力によって制限されている。しかし、その多様性の幅は、人類の場合、他の生物種では考えられないほど幅広く、だからこそ、第 2 回の講義で触れたように、人類は環境条件が多様な地球全体に広がった唯一の大型哺乳動物種になったわけです。

—大村：ここで重要なことが二つあるように思います。その一つは、人類の場合、こうした生物学的な能力の幅の広さが、社会性やニッチ構築や認知技能などが生物学的な進化とは独立した進化を可能にし、そうした非生物学的な進化の方向付けによって生物学的な進化が促され、700 万年という進化史的には短い時間で脳容積と脳の機能領域の爆発的な進化が促されたということだと思います。つまり、人類

の爆発的な進化は、社会性やニッチ構築や認知技能などの非生物学的な進化が生物学的な進化を方向づけて加速した結果だということですね。

―大村：もう一つは、このことの帰結として、人類の場合、生物学的な進化には、突然変異と自然淘汰という受動的なプロセスだけではなく、社会性やニッチ構築や認知技能の開発を通じた能動的なプロセスが含まれているということです。その結果として、第9回と第10回の講義で検討した人類の創造的な生きる力、あるいは前回の第13回に検討した人類の可変性が生じたというように考えることができる、つまり、「人新世」時代の現実を生み出したと同時に、その現実にあって求められている人類の創造性や可変性は、生物学的な進化に非生物学的な進化が連動した結果ではないかと思うわけです。

―大村：入来さん、いかがでしょう。

―入来：いま、生物と非生物、2種類の『進化』が出て来ましたが、最後にもう一度、この『進化』の意味を整理しておいた方が良いでしょう。日常会話の中では比喩的によく使う『進化』という言葉との違いです。例えば、スポーツ選手などの技術が向上することは『生長・発達』ですし、機会などの性能が向上することは『技術革新』ですし、アニメのキャラクターなどが生長して様変わりするのは『変態・メタモルフォーシス』で、いま問題にしている進化ではなく、比喩的な例えとしての表現です。いま私達が問うている人類の『進化』とは、ヒトという生物種が世代を超えて受け継がれて時間とともに変化発展してゆく有り様の事を言っています。そして、ヒトという生物種が「人新世」という他の生物種が経験したことの無い急激で大規模な変化を引き起こした原動力は、次の世代に引き継ぐ情報の新たな運び手として、文化や環境を利用し始めてそれが従来の遺伝子情報と相互作用させる術を発見したか編み出した、ということなのだと思います。遺伝子も文化も、実は進化の結果であり、また次の段階の進化の原因でもある、という循環・輪廻のメカニズムがいま正に解き明かされようとしているといえますね。

―大村：なるほど、そうですね。しかも、こうした生物学的な進化と非生物学的な進化の連動を未来にも延長して考えると、人類には、社会性やニッチ構築や認知技能の開発を通じた能動的なプロセスを通じた生物学的な進化の可能性が拓けてくる。極端な場合、私が『宇宙人類学の挑戦』という本や「人類でなくなるための人類学」という宇宙人類学の論文で論じたように、そうした能動的なプロセスを通して生物学的に進化し、地球に拘泥することなく、人類は宇宙に進出し、現在では想像できないような奇怪な生物に生成変化してゆくかもしれない。あるいは、今日の「人新世」時代の状況は、人類が地球に拘泥することなく、宇宙に出てゆきながら人類とは異なる存在に変容してゆくきっかけとして考えることができるかもしれません。そこまで想像を膨らませなくても、少なくとも、「人新世」時代の状況に対応してゆくために、こうした人類の進化の特徴、生物学的な進化と非生物学的な進化の連動による能動的な生成変化の可能性を有効に活用してゆく必要があるように思います。

―大村：そうした人類の未来について、入来さん、河合さんは、どんな展望をおもちか、最後に、一言、お言葉をいただけませんか。

―入来：進化論も進化します。私達がいま無邪気に信じている所謂進化論は、70年前あるいはせいぜい

150年前に提案された、良く出来た『仮説』にすぎません。人類進化というような、解き明かそうとする現象と無心に畏怖を持って向き合って、謙虚に真実を見極めようとする先に、また未来も立ち現れてくるのではないかと思います。

一河合：「他者とさまざまなやりとり＝社会的相互行為をしながらともに生きる」という人類が長い時間をかけて培ってきた共存の根源的なあり方、つまり「社会性」の基盤を維持しつつ、遠隔で出会い、やりとりする方法や、ヴァーチャルな空間への移動とそこでの出会いなど、コミュニケーションツールの開発が今後続くでしょうし、そうしたテクノロジーの飛躍的發展により、人類の他者との共存のあり方は変わっていくのかもしれませんが。そのとき「身体」の意味や価値がどう変わっていくのか。われわれは生身の身体をもって他者と出会うという実践をしてきました。そうした身体的存在としての人類がどこに向かうのか、注意深く追っていきたいと思います。

一大村：入来さん、河合さん、人類の未来の可能性を予感させる素晴らしいお話し、ありがとうございました。

4. 質疑応答・議論

<記述/規約/解釈：中川敏 (1995) 「民族誌的真理について」>

- 人間ではない異種の動物の行動を観察・記述する際には、理論負荷性の問題を考えなくてはならない。しかし、人間を観察・記述する際には行為の意図も透明で真理として問題ない、という訳ではないのではないか。
→社会性科研・方法論研究会のなかで、議論していきたい。
- 中川敏 (1995)の論考で抜けている点は「説明」の議論ではないか。「説明」と「解釈」のそれぞれの階梯が混同している。「解釈」とは原理的に外部からのものである。内部らしきものは、観察と記述にあたり規則を導入する際であり、それが「説明」のレベルだろう。内部的な現象・事象の整合的な記述は、きちんとした「説明」に基づくほかないのでは。
→中川敏 (1995)の論考には、「説明」の議論はない。民族誌の中では、行為の説明はしないという前提があるのかもしれない。
- 心理学者のエクマンは、表情をアクション・ユニットに還元し、笑顔をアクション・ユニットの動きによって記述しようとした。説明的な記述のなかに解釈が入ることはある。「考えながらの記述」と「考えない記述」でなにか研究に違いはでてくるのだろうか。

→なんのために記述するのかを意識している方が、生産的に記述ができるのではない
か。

- 「観察／規約／解釈」は、例えば「音・光／言語・習慣／個人の考え」と対応している
のでは。観察される人と観察する人の場合は、言語や習慣が共有されているため理解し
やすいが、サルとサルを観察する人ではそれらが共有されていないため「規約」レベル
の理解が難しくなるのではないか。

→指摘通りだと思う。

- 「規約」には真理性を論じることができるが、一方で「解釈」には真理性を論じること
ができないというのは、そこに「異議」が存在しているかどうかの差異だろうか。調査
対象が人間の場合、解釈が妥当であるかどうかは、現地（調査対象）の人が異議を訴え
てくれる。しかし、調査対象がサルの場合は異議を唱えるものが存在しない。人間以外
の動物を対象とする場合には、見解の一致というものが主題化できない。

→中川敏 (1995)の論考では、人間を観察した結果として、3つのレベル（観察/規約/解
釈）に分けている。人間以外の動物ではこういう分け方は通用するのかどうかは議論
していきたい。

- 3つのレベル（観察/規約/解釈）に応じて真理が問題となる程度が異なるというのは転
倒しており、実際の研究では見解が一致する程度に応じて観察/規約/解釈が分化してい
るのではないか。

→観察/規約/解釈は再帰的につながっている、というのは中川敏 (1995)も述べている。
中川敏 (1995)の論考は民族誌リアリズム批判への反論という側面もあるため、3つの
レベルを戦略的に分けたと思われる。クリフォードの「民族誌的権威について」とい
う論文のように、民族誌の内容の全てを解釈であるとされては困るため、民族誌の秩
序を取り戻す試みとして著者の中川敏さんは書いたのではないか。

<解釈の効果について>

- 中川敏 (1995)の論考では、解釈は多様であるということを意識せよという意味で「真
理はない」と述べたのではないか。

→指摘通りだと思う。解釈が正しいかどうかは、論じると果てがない。しかし、解釈す
ることにより「効果」はでてくる。

- 解釈について、真理性の基準に替え、他者への「効果」を代替として持ち出すことに危
うさを感じる。他者に効果的だが実は誤った解釈というものもありうる。

→悪い効果も良い効果もある。生業システムを持続的に生成するものという限定をし

た上で、効果について述べた。真理のように、普遍的に効果的というものではない。

- 現地の人の語り（解釈）が生業システムを持続的に生成させる上で効果的であれば意味があるということか。
→民族誌を書く人がその中に含まれる場合もあるし、含まれない場合もある。何の効果性かは、考えなければならない。

<物語について>

- 解釈に基づく物語＝世界と読み替え、社会の生産・生成という話しにつなげていくとのことだった。しかし、そのことが「できるのにしない」という後半の話しとどのように繋がるのか。
→物語は解釈の部分であり、「できるのにしない」とはレベルが異なる。
→「できるのにしない」は規約の部分で関わってくる。「できるのにしない」が、ある条件がそろとうするようになり規約の体系がいきなり変更されるという話しである
→解釈は、規約の体系（例：社会構造、言語構造）のようなものではない。解釈の方は、規約の体系の制限の中でその規約を運用しており、「実際にしている行為」である。
→物語は行為のうちのひとつであり、行為を接続することにより現実の生活世界を作るのである（例：混群ができる）。

<規約共同体について>

- 多くのサル学者は、サル社会は生物学的「規約共同体」であると思い込んでいるといえるのではないかと。そして、サルの行為を記述し生物学的規約（生態学的アルゴリズム）を解明することによりサルたちの行動・社会が私たちに解釈可能になると考えているのでは。サル達自身の自主性・行為性は従来棚上げか無視か否定されがちのように感じられる。
→私は、サルの社会においても、生物学的なアルゴリズムに還元不可な規約の体系があると考えている。規約の体系はある種の自律性を持っている。

<今後の方法論研究会の方向性について>

- 今後の社会性科研のプロジェクトの方向性として、レベル 2 の社会システム（規約システム）の類型化を行い、その後、「社会システムのタイプのそれぞれが一挙に成立する条件を、レベル 1（記述）とレベル 3（解釈・主体性・歴史）との相互作用から考える」と述べていたが、どのようなことか。
→解釈したある行動を起こす際に、周りの人やモノを導入する。それにより、規約が今までとまったく異なるシステムにパッと変わることがあるということである。

- レベル 3 (解釈・主体性・歴史) で述べていた「主体性」とはなにか。意図の有無の問題か。
→例えば、「なぜあの店に行ったのか」という問いに対し、「缶詰がほしかったから」・「死ぬために行った」など、どこで切り分けるかによって意図というのは変わり、意図は後づけでしか決定しない。また当人も自らの意図はその結果からしかわからない。そういうことを含めての「主体性」である。近代的主体とは異なり、「経験する主体」とは、自らの意図のためになにかを行っているとは限らない。
- プロジェクトにおいて、レベル 1 (観察)、2 (規約)、3 (解釈) の中ではレベル 3 (解釈) もやるべきなのか。
→レベル 2 (規約) にプロジェクトの焦点を当てた方がよいと考えている。レベル 2 をオートポイエーシスの話しでしたかった。